

第20回 京都市立病院 地域医療フォーラム

第I部

「地域の感染対策の現状について」①

合同会社ナースケア虹・訪問看護ステーション虹 管理者 西尾 希美重 様



京都府における訪問看護ステーション数はステーション協議会に加盟しているものが135事業所(2014.4.1現在)、この中で24時間の緊急対応をとっているのが103事業所あります。対象は0歳から120歳まで地域で在宅療養をしておられる方々です。訪問介護の内容としては①バイタルサインのチェックと全身状態の観察②清潔の支援(清拭や入浴介助など)③褥瘡予防及び処置④点滴の実施と管理⑤ターミナルケア⑥医療機器の管理と指導などを行っています。「訪問看護ステーション虹」は2009年2月に開設。当初から0歳児の小児の受け入れを想定しており、重症度の高い人工呼吸器管理が必要な利用者様の在宅支援をしています。現在の利用者数は51名で介護保険が33名、医療保険が18名(その内15歳以下の利用者は12名)。看護師は常勤3名、非常勤2名(常勤換算で3.8名)です。

感染対策については介護保険利用者に関する情報がほとんどないという状況下で、①排泄物を扱う時にはプラ手袋をする②手洗いを十二分に行う③予防着を着るといったことしかできないのが現状です。自宅であるという点を考えると、最低限の予防措置であると認識しています。尿からESBL産生

菌が検出された事例では、排便コントロールが必要であり、プラスチック手袋とガウン、マスクを装着してケア処置を実施。訪問看護師だけでなくガウンテクニックなどを行いました。1日に4~5件の訪問をしており、次の利用者の方への感染予防措置として重要であると判断しています。また、小児の場合は朝1番の訪問を基本としており、吸引や処置後などに行う手指



消毒は1処理1消毒を実施。発疹やおたふく風邪などの感染症に関してはマスクを着用し、着替えをした後に次の訪問に向かうようにしており、事前に感染が判明している時は最後に訪問します。在宅で感染させないためには、行政・病院・地域のかかりつけ医・サービス事業者との緻密な連携が非常に重要です。



「地域の感染対策の現状について」②

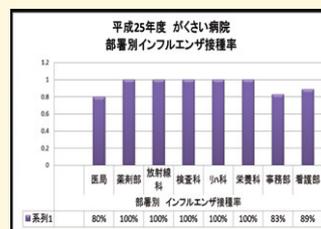
一般財団法人 京都地域医療学際研究所 がくさい病院 看護師長 中島 由希子 様



当院は京都市立病院の北隣に位置しています。昨年11月に当地へ新築移転しました。病床数は90床で一般病棟40床、回復期病棟50床です。主な診療科は整形外科・リハビリテーション科です。当院の感染予防対策(2013年度の活動内容)は①感染防止対策マニュアルの見直しと改定②研修会主催(年2回以上)③委員会ニュース発行(年4回発行)④院内サーベイランス⑤院内ラウンド⑥感染防止対策の啓発活動(ポスター掲示など)⑦感染防止対策・地域連携カンファレンス参加⑧委員会開催(1回/月)⑨その他です。

研修会では感染防止対策の基本として個人防護服の着脱法及び手洗いの指導などの基礎知識の案内を職員全員対象に実施。また、昨年の検体(検体数:99検体)の材料別ではドレーンが約80%で最も検体数が多かったのですが、細菌の検出はなく、非開放性膿、開放性膿、喀痰、滲出液からの検出がありました。検出菌は検出数9件(7検体・6菌種)です。次にインフルエ

ンザの発生状況を踏まえて当院の対応をご案内します。昨年の陽性患者の傾向は入院患者さんが5名、外来患者さんが3名、職員が2名です。職員に関しては院外受診の職員を含めると発症者は7名で看護師が6名でした。罹患職員は「発症した後5日を経過し、解熱した後2日を経過するまで」出勤停止、入院患者さんに



については上記期間は原則的に個室対応として接触感染防止策を取っています。また、同室者に発症患者さんがおられた場合は主治医が説明した後、希望があれば予防投与を実施。

さらに、院内感染予防委員会の委員長の命令で職員のマスク着用・手洗い励行などを徹底。全職員を対象にインフルエンザ接種も行いました。これからも職員の感染防止対策に対するさらに意識を高め、速やかに行動させることが重要であり、回復病棟のある当院としては転院元の病院との情報の共有も重視すべきであると考えています。

